

立場に立った丁寧な記述や編纂方法は、『ガニー』の最大の特徴であり、より多くの学習者や研究者に活用されるべき良書であろう。

日本では流通や入手方法に課題もあるだろうが、「ハンス・ヴェーア」の辞書一辺倒であり英語を介してアラビア語を学ばなければならない現状に、一石を投じる貴重な学習辞典が世に出たことを素直に喜びたい。同時に、いまだ日本に本格的なアラビア語-日本語辞典がない状況を真摯に受け止め、学習ツールの充実とさらなる教材開発を進めながら、今後の研究活動を拡充していきたい。

本稿は、JSPS 科研費（若手研究 B「湾岸アラブ諸国の勃興による現代アラビア語の変容と国際化」課題番号：15K16579）による研究成果の一部である。

(竹田 敏之 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科特任准教授)

ガザリー、中村廣治郎訳註『哲学者の自己矛盾——イスラームの哲学批判』（東洋文庫 867）平凡社 2015年 378頁

本書は、イスラーム思想史上最大の思想家の1人と評されるアブー・ハーミド・ガザリー (Abū Ḥāmid al-Ghazālī, d. 1111) が著した哲学批判書の翻訳である。翻訳を手掛けられた中村廣治郎氏は、ここで紹介するまでもなく、長年にわたり日本のイスラーム研究を牽引し、ガザリーの宗教思想を中心に研究を続けてこられた方である。東京大学、桜美林大学をご退職後も、精力的に研究発表や執筆活動を継続しておられる姿には、尊敬の念を抱かずにはいられない。それと同時に、評者自身、後に続く世代が一層努力しなければとの思いを強くする次第である。

ガザリーと哲学との関係については、中村氏が簡潔ながらも丁寧に紹介している通り、ガザリー研究においては主要なテーマの1つとなってきた [ガザリー 2003: 191–200; 2013: 465–469; 中村 2002: vii–ix など]。すなわち、神学者の立場から哲学を批判したガザリーは、しかし同時に哲学の影響を受けており、その哲学受容はいかなるものであったのか、という問題である。この問題について本稿で詳述することは控えるが、ガザリーが哲学を批判するために著したのが本書『哲学者の自己矛盾 (*Tahāft al-Falāsifah*)』(以下、『矛盾』と略記)であった。ガザリーは本書を執筆する前に、批判対象となる哲学説を十分に理解するべく『哲学者の意図 (*Maqāsid al-Falāsifah*)』という作品も著している。後には、ガザリーの『矛盾』への反論書『矛盾の矛盾 (*Tahāft al-Tahāft*)』が哲学者イブン・ルシュド (Ibn Rushd, d. 1198) によって著された。『矛盾』の翻訳が刊行されたことによって、これら一連の著作が『矛盾の矛盾』については抄訳ではあるが日本語で読めるようになったわけである¹⁾。このことはイスラーム思想に関心を持ち始めた初学者は勿論、研究者にとっても、きわめて有益であると考えられる。

ガザリーによれば、「知性と聡明さにおいて、並の人間とは異なると内心で思っている多くの人々」(p. 16)、つまり当時の哲学者たちは、「イスラームの義務を無視し、礼拝の勤めや禁止事項などの宗教的儀礼行為を軽蔑し、聖法上の義務や規範を軽視し、その禁止や抑制に従わない」(同) でいたという。彼らの不信仰の原因は誤った哲学説に騙されたためであり、そのような哲学説の誤り、危険性や欠陥を明らかにしようとして、ガザリーは本書の執筆に取りかかったという。但し、併せて次のようにも述べている。

そもそも彼らが模倣しようとするこれらの哲学の領袖たちは、彼らが非難されているような聖法の否定とはほんらい無関係であり、彼らは神を信じ、その使徒たちを真実としていることが確認されている。ただ彼らは、これらの根本信条以外の些末的な事から誤りを犯し、正しい道を自ら踏み外し、また〔他人をも〕そうさせていたのである (pp. 18–19)。

哲学者たちの全てが、直ちに批判の対象となるのではないのである。『矛盾』の中には、「イブン＝スィー

1) 各著作の翻訳書については、稿末の文献表を参照のこと。なお、『矛盾の矛盾』については、田中千里氏が後述する第1問題の始めと第17–20問題を、竹下政孝氏が第3問題をそれぞれ訳出している。

ナーや他の真理の探究者たち」(p.123)や「イブン＝スィーナーやファーラービーや彼ら(哲学者たち)の中の真理の探究者たち」(p.141)といった表現もあり、一部の哲学者に対しては、正しい知識人として敬意を払う様子が窺われる。こうした記述からも、ガザリーがただ専ら哲学を批判し切り捨てるのではなく、一定の理解を示していたことが分かるだろう。

本書の中で一貫して、ガザリーは哲学者たちの方法論である論理学に則り、哲学説を批判していく。つまり、哲学者たちは彼ら自身の方法論を正しく用いられずに、誤った結論を導き出してしまっている、という「矛盾」を暴いていくのである(のちにイブン・ルシュドは、ガザリー自身もその方法論において間違いを犯し、誤った結論を導き出しており、『矛盾』は矛盾している、と批判するわけであるが)。ガザリーは序論の中で次のように述べている。

……われわれは神学者や法理論家の用語を避け、本書では理性の認識能力についての議論に限定し、さらにそれを論理学者の用語に換え、彼らの形式で表現し、一語一語彼らのやり方を踏襲したいと思う。本書では、われわれは彼らの言葉で、つまり彼らの論理学の用語で彼らと議論し、さらに次の点を明らかにする。すなわち、彼らが論理学上の証明において三段論法(qiyās)の基本的命題成立の条件としたこと、さらに三段論法の書におけるそれらの形式の条件、および[ポルビュリオスの]『イサゴゲー』や[アリストテレスの]『カテゴリー論』において論理学やその前提の一部として彼らが設定したこと——これらが、彼らの形而上学ではまったく充たされていないということである(p.29)。

ガザリーが本書の中で論じる20の問題を、目次をもとに以下に挙げてみよう。

- 第1問題——世界の無始性についての彼らの説の批判
- 第2問題——世界の無終性についての彼らの説の批判
- 第3問題——神は世界の造物主であり、世界は彼の被造物である、との彼らの言説の欺瞞性についての証明
- 第4問題——彼らは造物主を定立できないこと
- 第5問題——彼らは二神の可能性を証明できないことの説明
- 第6問題——[神の]属性の否定についての彼らの説の批判
- 第7問題——第一者そのものは類や種によって区分できない、との彼らの説の批判
- 第8問題——第一者は本質のない単純存在者である、との彼らの説の批判
- 第9問題——第一者は物体ではないことを彼らは主張しえないことについて
- 第10問題——物質主義と造物主の否定が彼らの説の帰結であること
- 第11問題——第一者は他者を知る、と彼らは主張しえないこと
- 第12問題——第一者は自己を知る、と彼らは主張しえないこと
- 第13問題——第一者は個物を知らない、との彼らの説の批判
- 第14問題——天体は意志をもって動く動物である、との彼らの説について
- 第15問題——天体を動かす目的についての彼らの説の批判
- 第16問題——天体霊はすべての個物を知る、との彼らの説の批判
- 第17問題——奇跡は不可能との彼らの説の批判
- 第18問題——人間の靈魂は自体的に存立する実体であって、物体でも偶有でもない、との彼らの説について
- 第19問題——人間の靈魂は不滅である、との彼らの説について
- 第20問題——肉体の復活と天国・地獄における身体的快苦に対する彼らの否定に対する批判

これらの諸問題について、それぞれにまず哲学説を紹介し、続いて反論を示す。多くの場合、後述するよように、哲学者たちから想定される再反論、それに対する再々反論と議論が展開されている。ガザリーがどのように哲学説を批判しているか、第1問題に関する議論から少し紹介してみよう。

第1問題として取り上げる「世界の無始性」に関して、ガザリーは哲学者による4通りの証明を示し、順に論駁していく。哲学者による第一の証明はおよそ以下の通りである。以前に存在しなかったものを生じさせようとするとき、神の側に能力、手段、目的や意志の変化が生じるはずである。しかし、無始なる永遠者である神の状態は常に等しいため、神には一切の変化はありえない。それゆえ、世界が現に存在しており、且つその生成が不可能であるならば、世界の永遠性を認めざるを得ない。

このような証明に対し、ガザリーは「最も創造力豊かな証明」(p.37)と酷評し、論理的証明とは認めない。そして、次のように反論する。永遠なる神の意志が、世界がある時点から存在し、それ以前の非存在がその限度がくるまで持続し、世界の存在が始まったその時点で始まるように要請したのである、と。さらに、このようなガザリーの反論に対して、哲学者からの再反論が始まる。哲学者によれば、もし神が世界の創造を意図しながら、その創造がなされないということ(すなわち、神学者が認めるように、神のみが存在し、世界は存在していないという状況)があれば、それは何らかの障害があって意志の結果(すなわち、世界の創造)が遅延したと考えられる。しかし、神を妨げるものなどはありえず、世界の創造を生じる原因として神のみが必要である場合に、世界の創造という結果のみが遅れ、何の条件の変化もなしに、あるとき結果が存在へと移行する(世界の創造が果たされる)ということは不可能である。このような哲学者の証明は、人間の行為における意志や意図から類推されたものであり、やはりガザリーは論理的証明とは認めない。

あること——それが何であれ——を生成させることに永遠の意志が関わることの不可能性を、君たちは理性の必然性(darūrah al-'aql)によって知ることか、あるいは論証によって知ることか。君たちの論理学用語に従えば、君たちは媒概念(hadd awṣat)の有無のいずれによって、二つの概念(ものの生成と永遠の意志)の結合を知ることか。もし媒概念を主張するのなら、それは論証ということになるが、それを明らかにする必要がある。……君たちが述べたことは全て、蓋然的な困難であり、われわれの決定や意志からの類推にすぎないからであり、それは誤りだからである。永遠なる意志は生成する意欲とは同じではないし、単に困難であるということだけで証明がなければ不十分である(pp.40-41)。

ガザリーはこのように1つずつ、徹底的に哲学説を論駁していくのである。20の問題の中でも特に、世界の永遠性(第1、2問題)、神の個物知の否定(第13問題)、復活の否定(第20問題)の3点については、不信仰と判断せざるを得ないという。これらがクルアーンに基づく伝統的信条に明らかに反するためである。他者を不信仰と判断することは、不信仰者宣言(takfīr)と彼の殺害義務につながりかねない。ガザリーは本書の結論の冒頭で、「すでに君たちは、これらの人々(哲学者たち)の立場について詳しく説明した。そこで君たちは、彼らの不信仰を認め、同じ信条をもつ人に対して、殺害の義務があるとの判断を下すのだろうか」(p.355)と問いかける。ガザリーはこの問いに対し、上記3つの問題以外の哲学説に関してはイスラームのいずれかの派(ムウタズィラ神学派など)が述べている説と同じであるととし、不信仰判断をこれら3つの点に限定する。そして、それ以上の判断は差し控えている。もしこれが、昨今のいわゆるジハード主義者であったならばどうであろうか。他者に対し、わずかでも不信仰と認定しうるものを見つけたならば、きっとその者の殺害を命じるに違いない。しかし、中世の偉大な思想家ガザリーがそのような暴挙に及ぶことはない。先に池内恵氏が本書を紹介する中で述べていたように、きわめて「理知的で寛容」な態度を表明している[池内2016]。

当時の最高学府であるバグダードのニザーミーヤ学院の教授として、厳しく哲学説の誤謬を批判しつつも、そこには哲学に対する尊敬と寛容が織り交ぜられている。本書を通して、中世イスラーム思想の1つの到達点を是非多くの人に味わっていただけることを願う。

<参考文献>

- アヴェロエス 1996『《アルガゼルの》哲学矛盾論の矛盾』(田中千里訳)近代文藝社。
 池内恵 2016「聖戦テロの根底にある啓示と理性の闘争」『週刊エコノミスト』2月2日号, p.59。
 イブン・ルシュド 2000「矛盾の矛盾」(竹下政孝訳・解説 上智大学中世思想研究所編 竹下政孝監修)『イスラーム哲学』(中世思想原典集成11), pp.891-1018。

ガザリー 1985『哲学者の意図——イスラーム哲学の基礎概念』（イスラーム古典叢書）（黒田壽郎訳・解説）
岩波書店。

—— 2003『誤りから救うもの——中世イスラーム知識人の自伝』（中村廣治郎訳注）ちくま学芸文庫。

—— 2013『中庸の神学——中世イスラームの神学・哲学・神秘主義』（東洋文庫 844）（中村廣治郎訳注）
平凡社。

中村廣治郎 2002『イスラームの宗教思想——ガザリーとその周辺』岩波書店。

（加藤 瑞絵 清泉女子大学文学部非常勤講師）

**辻明日香『コプト聖人伝にみる十四世紀エジプト社会』(山川歴史モノグラフ 32) 山川出版社 2016年
196+63頁**

本書は、コプト教会に伝わる聖人伝を基に、13世紀後半から15世紀初頭までを含む「長い14世紀」のエジプト社会を描き出すことを試みた労作である。

この14世紀とは、マムルーク朝政権の反ズィンミー政策によりコプトの教会や修道院が破壊され、イスラームへの改宗が進んだ結果、コプトの人口比率が1割ほどに減少した時期とされている。また、14世紀とは、コプト教会で歴史叙述などの文学活動がほぼ途絶えた時期とされているが、一方で、同教会は同時期に活躍した隠修士や修道士の生涯を聖人伝という形で独立した文学として編纂するようになった。このような背景を踏まえた上で、このころ編纂されたコプト聖人伝を通して、当時のコプトをめぐる社会状況およびその変化を浮かび上がらせようというのが、本書全体のねらいである。

以下に、本書の目次と概要を示す。

序章 コプト聖人伝研究の意義

第I部 下エジプトにおける聖人の活動 13～14世紀初頭

第1章『ハディード伝』の世界 下エジプトの司祭

第2章『ユハンナー・アッラッバーン伝』の世界 下エジプトのキリスト教社会

第II部 カイロとその周辺における聖人の活動 14世紀

第3章『バルスーマー伝』の世界 隠修士としての聖人

第4章『アラム伝』の世界 「聖なる狂者」とは何か

第5章『ルワイス伝』の世界 迫害下の聖人

第III部 上エジプトにおける聖人の活動 14世紀後半

第6章『ムルクス・アルアントゥーニー伝』の世界 修道院における暮らし

第7章『イブラーヒーム・アルファーニー伝』の世界 ある修道士の生涯

終章 聖人伝に描かれたエジプト社会

序章では、エジプトにおけるイスラーム期のムスリム・キリスト教徒関係の先行研究、13世紀までのコプトの略史、アラビア語によるコプト聖人伝史料についての概要が紹介される。

次に第I部の第1章と第2章では、13世紀から14世紀初頭を生きたハディードおよびユハンナー・アッラッバーンの聖人伝を基に、当時の下エジプトのコプト教会における聖人崇敬の状況と、当時のコプトの人々が経験した重税、教会破壊、飢饉と疫病などの状況が分析される。また、ユハンナー伝に記された地名から、当時のデルタ地方におけるキリスト教徒の勢力範囲の変化が検討される。

第3章では、コプトの聖人であるバルスーマーが、ムスリムの聖者と同様に政府と一般の人々の間の仲介者としての役割を果たしていたことが指摘される。またバルスーマーの崇敬者にはムスリムも相当数含まれていたこと、そしてそれが同聖人伝に記載されたことは、他の宗教に対するコプト教会の優越性を主張する意図があったであろうことが指摘される。